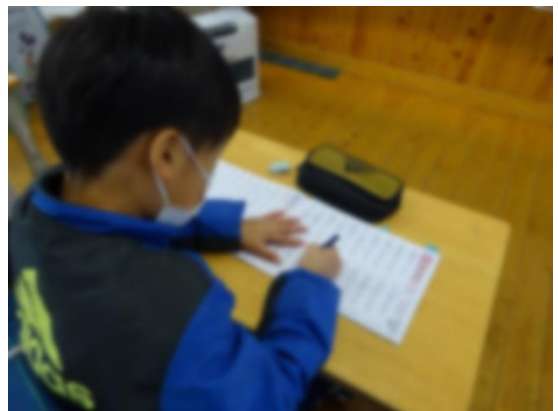


令和2年度 教育論文

研究主題

# 読む楽しさを味わう子どもの育成

- 意図的・計画的な読書活動を通して -



御船町立御船小学校 研究同人

# 《 目 次 》

○はじめに

I	研究の概要	1
1	研究主題について	
2	研究の内容	
II	研究の実際	5
1	[視点1]読書活動の推進について	
2	[視点2]国語科の授業の工夫・改善について	
3	[視点3]基礎学力の向上について	
III	研究の結果と考察	15
IV	研究の成果と今後の課題	17
1	研究の成果	
2	今後の課題	

○おわりに

○参考文献／研究同人

## はじめに

平成30年度末に、子どもたちの実態を顧みて、子どもたちの課題は何か、子どもたちに身に付けさせなければならない力は何かについて考えました。熊本地震以降、学力の低下がなかなか解決できていません。すなわち子どもたちに「学力」を身に付けさせなければならないことがわかりました。

そこで、当時上益城教育事務所指導主事で、現上益城教育事務所の濱本指導課長に相談してみました。当時濱本指導主事は、これまでの上益城郡の子どもたちの実態と事務所として取り組んできたことから学力の向上には読書活動が必要ではないかと話されました。その中で、「『学力が高い子どもたちは読書をよくしていること』は言えるが、『読書に親しんでいる子は学力が高い』と言えるかは、はっきりしない」ということを話され、本を読むことの意義等を詳細に説明していただきました。そして、『読書に親しんでいる子は学力が高い』と言えることを確認することを提案されました。『学力向上御船小プラン』として取り組んでいこうと決めた瞬間でした。

昨年度は、校内研究のテーマを「読む楽しさを味わうことができる子どもの育成 ～読書活動の改善・充実をめざして～」として、「本年度はとにかく、子どもたちが少しでも読書に親しんでくれればよい」ぐらいの目標で取り組み始めました。

その結果、読書に親しむ子が増えてきましたが、残念ながら学力調査等の結果までには至りませんでした。

そこで、本年度は『学力向上御船小プラン』の2年目として、テーマを「読む楽しさを味わう子どもの育成」サブテーマを意図的・計画的な読書活動を通してとして、読書に慣れ親しむ機会を意図的・計画的に実施するとともに、読書活動の要となる国語科の授業の工夫・改善、読むためのスキル獲得を目指す基礎学習の時間の充実を図る取組をしていくことにしました。

こういった読書を大きな柱としての学力向上を目指す取組は、一朝一夕結果が出てくるものではありませんが、子どもたちに確かな力を身に付けさせるために必要なことであると信じ、取り組んできました。12月段階で、取組が学力につながっているかについて、私たち職員は何となく手応えらしきものを感じていますが、成果として表れているかはなんともいえません。

しかし、『学力向上御船小プラン』はきっとまちがいなく成果を出せると信じ継続して取り組んでいきます。

どうか、ご一読いただき、ご指導いただければありがたいです。

# Ⅰ 研究の概要

## 1 研究主題について

### (1) 研究主題

#### 「読む楽しさを味わう子どもの育成」

- 意図的・計画的な読書活動を通して -

### (2) 主題設定の理由

本校の学校教育目標は、「ふるさとを愛し、21世紀をたくましく生きぬく子どもの育成」である。また、「自立」、「協働」、「創造」を育てたい資質・能力と位置付けている。これらの実現のため、「かしこく部」、「やさしく部」、「元気よく部」、「のびゆく部」の四つの部会に分かれ、全職員が一致団結し子どもの育成のために尽力している。学校目標及び育てたい資質・能力の具現化のためには、学力保障が必要不可欠である。

昨年度実施した町学力調査（4月実施）と県学力調査（11月実施）の国語・算数における同一集団の経年変化を見ると、ほとんどの学年で町の平均値を下回り、学力の伸びも見えなかった（図1）。

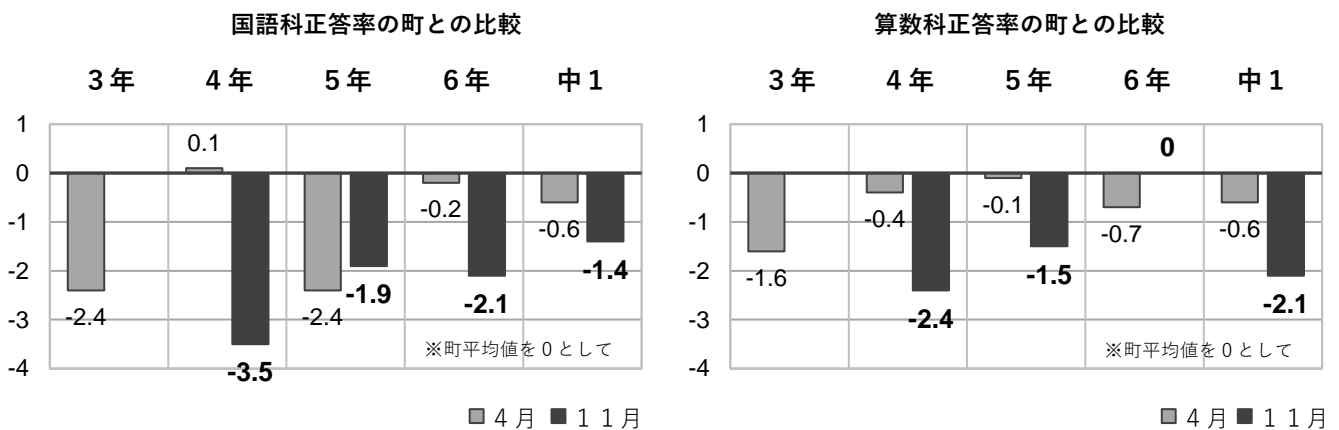


図1 令和元年度実施「町学力調査（4月）」と「県学力調査（11月）」の結果 ※第3学年は県学力調査未実施

本校の大きな課題は学力向上である。学力調査の結果からも、学習内容の定着は不十分な状況にあり、切迫した課題であるといえる。

本年度から新学習指導要領が本格実施された。今回の改訂の基本的な考え方のひとつとして「知識及び技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する平成20年改訂の学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質を更に高め、確かな学力を育成すること」が示されており、子ども一人一人に確かな学力を身に付けさせることができるよう、教育活動を展開していくことが求められている。

一方、昨年度の国立教育政策研究所の全国学力・学習状況調査報告書から、次のことが指摘された。

- 以下と回答している児童生徒の方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。
  - ・読書は好き ・新聞を読んでいる ※他2項目有り
- 以下と回答している児童の方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。
  - ・学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たり30分以上読書をする（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）
  - ・昼休みや放課後、学校が休みの日に、本（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）を読んだり、借りたりするために、学校図書館・学校図書室や地域の図書館に月に1回以上行く

学力の向上を目指す取組を進めていく上で、適切な学習習慣としての読書をいかに取り入れていくかは重要な視点といえるであろう。

全国学力・学習状況調査（令和元年度実施）の読書習慣に関わる質問項目の結果は、次のとおりである（図2）。本校は、全国及び県平均値から大きく下回っており、適切な読書習慣が身に付いているとはいえない状況にある。

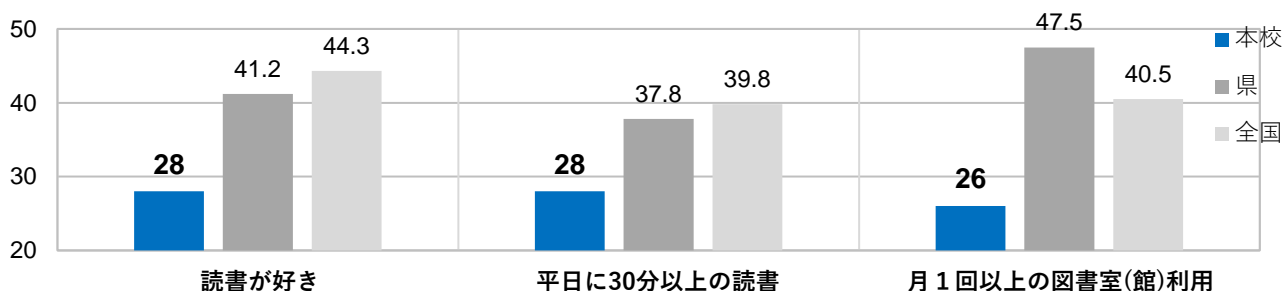


図2 令和元年度実施全国学力・学習状況調査の結果

これらの結果から、「読書活動」をひとつの切り口として、学力向上の取組を行うことは、本校の課題の改善と教育目標の具現化を図るものといえるであろう。しかしながら、読書を大きな柱として学力向上を目指す取組は、一朝一夕に結果が出てくるものではない。目的と計画性のある読書活動を展開し、より効果的に本校の教育課題の改善と本校教育目標の実現を目指すために、本研究主題を設定した。

### (3) 研究主題の捉え方

#### ア 「読む楽しさを味わう子ども」について

「読む楽しさを味わう子ども」とは、次のような姿になっている子どもと捉える。

自ら進んで読書をして、読書を通して人生を豊かにしようとする子ども

この姿は、どのように社会・世界・人と関わり、よりよい人生を送るかという、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養に深く関わるもので、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の二つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素である。本年度は、「読む楽しさを味わう子ども」の育成を目指すにあたり、次の努力目標を設定した。

- 子どもの90%が読書好きである
- 「勉強になるから」本を読む子どもの増加
- 平日に30分以上読書する子どもの割合を現状から20%向上する
- 月1回以上の図書室利用率が100%
- 国語好きな子どもの増加
- 国語の学習を日常生活に生かそうとする子どもの増加
- 単元末テストでの言語事項の定着率が80%以上
- 県学力調査の結果で前年度を上回る

#### イ 「意図的・計画的な読書活動」について

本研究における「読書」とは、本を読むことに加え、教科書、新聞、雑誌を読んだり、何かを調べるために関係する資料を読んだりすることを含んでいる。

読書による教育効果をより高めるには、その活動に明確な目的と計画性をもって取り組む必要があると考える。その読書活動の要となるのは国語科である。子どもの読書意欲を高め、日常的な読書活動につながるような授業への工夫・改善が求められるだろう。また、そもそも読むことに対する抵抗感をなくす取組も必要となる。そのひとつが基礎学力の向上である。

すべての子どもが読む楽しさを味わうために、読書活動の推進を大きな柱として、それに伴う国語科の授業の工夫・改善と基礎学力向上の取組を関連させていく。その結果として学力の向上につながる指導等の在り方や環境整備について工夫・改善を図る。このような一連の教育活動を「意図的・計画的な読書活動」と捉えることとする。

## 2 研究の内容

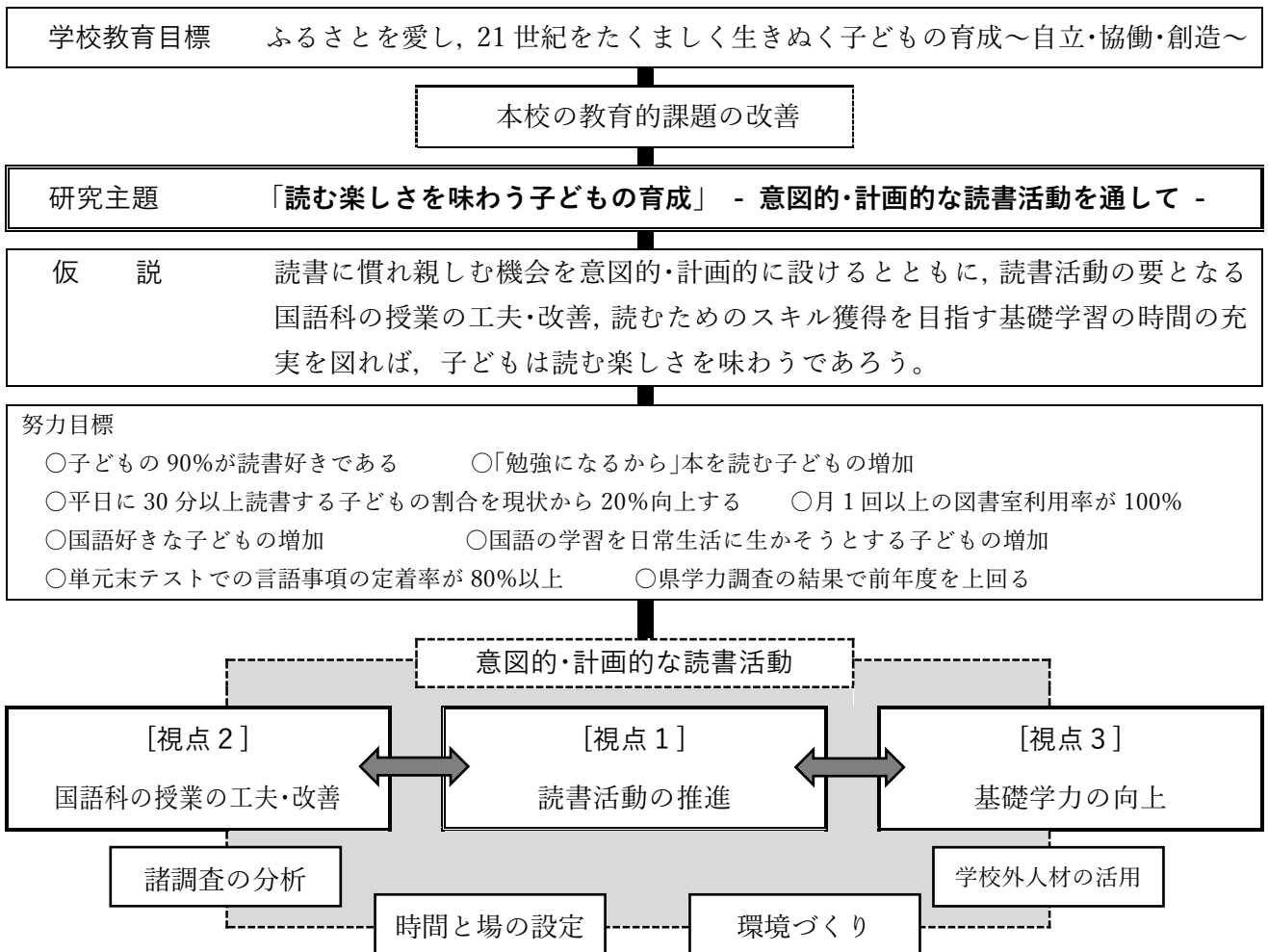
### (1) 研究の仮説

読書に慣れ親しむ機会を意図的・計画的に設けるとともに、読書活動の要となる国語科の授業の工夫・改善、読むためのスキル獲得を目指す基礎学習の時間の充実を図れば、子どもは読む楽しさを味わうであろう。

(2) 研究の視点

視 点	具体的な方策
[視点1] 読書活動の推進	○朝読書      ○図書室利用時間の整理 ○本紹介      ○児童会活動との連携 ○町図書館の活用
[視点2] 国語科の授業の工夫・改善	○4つの視点に基づく授業づくり ・ 中心的な学習課題の設定 ・ 振り返りシートの活用 ・ めあて、まとめ、学習課題の適切な設定 ・ ペアトークの積極的な活用
[視点3] 基礎学力の向上	○朝ドリル                      ○補充学習 ○モジュール学習              ○家庭学習の工夫

(3) 研究構想図



## II 研究の実際

### 1 [視点1]読書活動の推進について

#### (1) 朝読書

継続的に読書に親しみ、読書習慣を育むことをねらいとし、朝読書を行った（資料1）。充実した活動となるように、次の工夫を行った。



資料1 朝読書の様子

#### ア 環境整備

朝読書は、毎朝午前8時25分から午前8時35分までの10分間、全校児童で行うことにした。10分間の読書時間を確保することと静かに読む環境をつくるために、事前に本の準備をし、チャイムと同時に読み始めるようにした。

#### イ 国語科の学習との関連

質の高い読書活動となるように、国語科の学習との関連を図った。本校の読書に対する意識調査からは、国語科で学習した物語の同じ作者の本を読みたいと思っている子どもが多いことがわかった。そのため、事前に担任から学習と関係する本の紹介をし、学習した物語の同じ作者や同じシリーズの並行読書、関連書籍の読書を朝読書の時間に行った。2年生ではアーノルド＝ローベルの作品、4年生では新見南吉の作品を紹介した。また、1年生では「むかしばなしをよもう」の学習期間中は、「むかしばなし」に限定して朝読書を行った。その後、朝読書で読んだ「むかしばなし」の中から自分の好きなお話をみんなに紹介した。5年生では「やなせたかし」の伝記の学習の一環として、他の伝記作品を読んで紹介し合う活動を行い、朝読書との関連を図った。本は教室横に準備し、いつでも手に取れるようにした



資料2 教室横に設置した本棚

（資料2）。



## (2) 図書室利用時間の整理

学校図書館は「学習センター」としての機能も有する。これまでは複数の学級で図書室利用時間が重なることがあり、子どもが本と向き合う時間を十分に確保できていなかった。本校の図書室利用の促進を図るために、利用時間を整理した。原則全学級が図書室を週1回利用できるようにし、週行事予定表に明示した（資料3）。

8月～9月					
令和2年度 週予定 (8月31日～9月4日)					
日	8月31日	1	2	3	4
曜日	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
行事	夏休み(3-1) 4日まで	安全点検 身体測定(高) 認知症学習会 14:05～(6-1)	認知症学習会 14:05～(6-2)音 大ボラ 校内研	委員会活動 音大ボラ	音大ボラ 語る会
8:20～8:25	健康観察		うがい手洗い・健康観察		
8:25～8:35	読書				
8:35～8:45	ドリル				
8:50～9:35	1	図書室(3-1)	外国語(4-1) 理科(6-1) 月と太陽 図書室(6-2)	図書室(5-2)	図書室(5-1) 図書室(6-2)
9:45～10:30	2	理科(4-1) 雨水のゆくえ	外国語(4-2) 理科(6-2) 月と太陽	理科(5-2) 植物の実や種子 のてき方	外国語(6-1) 図書室(4-1) 理科(5-2) 植物の実や種子 のてき方 (テスト)

※図書室利用時間は赤の下線の時間

資料3 週行事予定表の一例

## (3) 本の紹介

これまでの取組から、子どもたちは本選びに悩んでいること、担任は「幅広いジャンルの本と出会ってほしい」、「発達段階に応じた本を読んでほしい」という願いをもっていることがわかっている。これらの課題改善を目指し、次の本紹介の取組を行った。

### ア 学校図書館司書による本の紹介

月に2回来校する学校図書館司書による本の紹介を行った（資料4）。本の選定を学年に応じて行った。さらに、より本と深く関わるきっかけとなるように、自らの本との出会いや読書の楽しみ方など、発達段階に応じた話を交えながら本を紹介した（資料5）。また、紹介された本は朝読書の時間に活用した。



資料4 学校図書館司書による本紹介の様子

#### 【子どもの感想より（第3学年）】

6時間目に図書室で上田先生の話をお聞きしました。その時、たくさん本を紹介してくれました。一番学んだことは、本の楽しみ方です。かなしい時やうれしい時に本を読むと、かなしい時は楽しくなり、うれしい時は、その10倍うれしくなるということです。早くいろんな本を読みたいです。

資料5 学校図書館司書による本紹介後に書いた子どもの感想

### イ 児童相互による本の紹介

適宜、国語科の時間を用いて、児童相互による本の紹介を行った。6年生では、図書室で本を借りる際に友達にアドバイスをし合ったり推薦したりした。

## ウ 必読書の紹介

子どもの読書の幅を広げることを目的に、必読書を選定した。学年ごとに、教科書の参考図書や学校図書館司書の意見をもとにリストを作成した。リストは、子どもたちが意欲的に取り組めるように必読書カードにし、全児童に配付した（資料6）。図書室で本を借りる際の参考となるよう、本紙は読書の貸出しカードの裏面に貼り付けることにした。



資料6 作成した必読書カードの一例(低学年)

## エ 保護者への本紹介

感染症拡大防止による休校中に、家庭で本を選ぶ際の参考になるよう「推薦図書リスト」を全家庭に配付した（資料7）。このリストは、以前上益城郡で作成したものである。紹介文のほか、著書名、出版社が明記されており、家庭での活用が容易なことから活用した。

かみつき推薦図書リスト（小学校中学年向きⅠ）			
書名	著者	出版社	紹介文
1 エルマーのぼうけん	ゲネット/ かなべしげお	福音館書店	9さいの男の子、エルマー・エレベーターは、つかまったりゅうの子どもを助け出すために動物村にのりこみます。そこには、いろいろな動物がぼんぼんまわっています。エルマーのちえと勇気がいっぱいあったお話です。
2 チャーリー・ブラウンなぜなんだ？	シュルツ/ 増谷 亮太	岩崎書店	ある朝、チャーリーの友だちジャニスがガンにかかってしまいます。だんだん体弱が悪くなり、かみの毛もすべてぬけおち……。やがて回復するジャニス。お友だちを助したり、治療をようこんりりする気持ちのひしひしと伝わってきます。
3 歯むきおに	森山 竣夫	鹿嶋社	古い塙の真ん中に小さな窟に、ひとりぼっちでおにが住んでいました。おにには毎日毎日さびしくてしょうがなかった口からまがせをしんじて、鼻をひっぱって窟をたどっていきますが……。人間とどかなくなりたい窟にの気持ちが切ないお話です。
4 あやとりひめ 五色糸の物語	森山 京	理論社	なくなっただお母さんがのこしてくれた五色糸は、ふしぎな糸。窟に出たアヤには、次々と色とりどりのお母さんがあやかまが、五色糸はアヤを助けてくれます。ハラハラ・ドキドキの冒険物語です。
5 オニのぼうやがっこうへいく	ゴドラ/ 石津ちひろ	平凡社	オニのぼうやは毎日つまんなくって大あはれ。食べることにしかならないうちの強いひびきでママやパパともおそんでくれません。でも、1きつもの「本」との出会いが、ぼうやと一家のくらしをあざやかにかえていきます。フランスの名作絵本です。

資料7 活用した推薦図書リスト(中学年)

## (4) 児童会活動との連携

子どもが自ら読書環境を整えたり読書意欲の喚起を図ったりすることで、主体的に読書と関わるができるようになった。本年度は感染症拡大防止のために活動が制限されたが、図書委員会が中心となり、次の取組を行った。

### ア 本の紹介

2学期の読書月間にあわせ、図書委員会の委員一人一人によるおすすめの本の紹介を行った。毎月の定例の活動時間に「本の紹介カード」を作成し、図書室近くの掲示板に掲示した（資料8）。また、給食の時間に校内放送で本の紹介を行った。



資料8 図書委員による本紹介の掲示

## イ ミニ図書コーナーの設置

ちょっとした待ち時間や自由な時間に気軽に本を読めるように、玄関ホールにミニ図書館を設置した（資料9）。毎月の定例の活動時間に、図書委員が本を選び、入れ替えを行った。また、これまで図書室前においていた「子ども新聞」を、子どもが手に取りやすい同コーナーに並べた。新聞への興味・関心が高まるように、今日の話題のニュースやおもしろい記事を給食時間に放送した。



資料9 ミニ図書コーナーの様子

## ウ 読み聞かせの動画の作成

読み聞かせの効果は、さまざまな研究からも指摘されている。本年度は、感染症拡大防止の観点から密を避けるために、動画による読み聞かせを企画した。タブレットを用いて動画を作成（資料10）し、読み聞かせ動画として活用することにした（3学期完成予定）。



資料10 動画作成の様子

## (5) 町図書館の活用

子どもの興味・関心に応じた本を、学校の図書室だけでまかなうことには限界がある。そこで、学校近くにある町の図書館を活用した。地域の図書館利用の促進は、本校の課題のひとつでもある。身近な施設として少しでも関心をもち、子どもたちが利用できるように、低学年期からの活用を進めた。

第2学年生活科「みんなでつかうまちのしせつ」の学習では、本施設を見学し、関心を高めるきっかけづくりを行った。司書による本紹介や講話も行った（資料11）。



資料11 町図書館見学の様子

## 2 [視点2]国語科の授業の工夫・改善について

国語科の授業づくりの視点として「①中心的な学習課題の設定②振り返りシートの活用③『めあて』『まとめ』『学習課題』の適切な設定④ペアトークの積極的な活用」を設定した。

### (1) 中心的な学習課題の設定（第6学年「帰り道」の実践から）

本単元のゴールは、「ひとつの出来事を複数の立場から描かれることによって見えてくる登場人物の相互関係や心情，人物像や物語の全体像を想像することのおもしろさを味わい，それを伝えようとする子ども」である。それに迫るための中心的な学習課題として、「『帰り道』の作品の感想をまとめ，作者に送ろう」と設定した。中心的な学習課題は，子どもの実態に配慮しながら，子どもにとってより魅力的なものとなるようにした。それにより，学ぶ目的の明確化と学習意欲の喚起を図った。

以上を踏まえ作成した単元指導計画は，次のとおりである（資料12）。

単元終了時の子どもの姿（単元のゴールの姿・期待される姿）			
ひとつの出来事を複数の立場から描かれることによって見えてくる登場人物の相互関係や心情，人物像や物語の全体像を想像することのおもしろさを味わい，それを伝えようとする子ども			
単元を通した学習課題（単元の中心的な学習課題）		本単元で働かせる見方・考え方	
「帰り道」の作品の感想をまとめ，作者に送ろう。		登場人物が見ているものとその表し方，会話文や心内語，情景を表す言葉に着目し，言葉への自覚を高めること。	
指導計画と評価計画（5時間取扱い 本時4/5）			
過程	時間	学習活動（「問い」を設定しても可）	評価の観点等 ★は記録に残す評価の場面で「具体的評価規準」
一	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 本単元でのゴールの姿と単元を通した学習課題を全体で確認し学習計画を立て，学習の見通しをもつ。</li> <li>○ 登場人物が見ているものとその表し方の描写から，同じ出来事に対する「律」と「周也」の捉え方や心情を読む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★【態①】ノート・ワークシート</li> <li>★【思①】ノート・発言</li> <li>○ 「律」と「周也」が見ているものとその表し方から，二人の相互関係や心情を捉えている。</li> </ul>
二	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 会話文や心内語，情景を表す描写から，「律」と「周也」の人物像を読む。</li> <li>○ 最後の会話文の「行こっか。」「うん。」をそれぞれ誰が言ったのか考え，「律」と「周也」の心情の変化を読む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★【知①】観察</li> <li>○ 人物を表す言葉を手がかりに，その人物の心情が伝わるように音読している。</li> <li>★【思②】ノート・発言</li> <li>○ 「律」と「周也」の会話文や心内語，情景を表す言葉から，二人の人物像と心情の変化を想像している。</li> </ul>
三	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ これまでの学習を生かして感想をまとめ，級友と伝え合う。</li> <li>○ 単元で身に付けた力について振り返る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>★【態①】ノート</li> <li>○ 進んで視点の違いに着目して心情などを捉えて読み，感想を書いて伝え合おうとしている。</li> </ul>

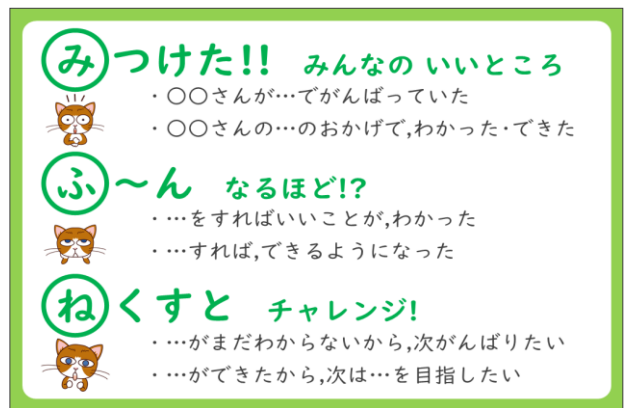
資料12 単元指導計画（第6学年「帰り道」）

(2) 振り返りシートの活用 (第2学年「お手紙」の実践より)

授業の終末には、振り返りの時間を設けることにより、一人一人の学びをより明確にしたり、次時以降の学習意欲につなげたりした。そのために、全学年共通の振り返りの視点を設けた(資料13)。視点は全学年で共通としたが、学年の発達段階に応じて振り返る方法は工夫するようにし、臨機応変に活用できるようにした。

本実践では、毎時間の授業の終末に振り返りシートに書く時間を設けることにした(写真14)。

シートは、単元のゴールを子どもと共有すると共に見通しのある学習となるように、主な学習内容と振り返りの記入を合わせて1枚にまとめた。指導者は、子どもの振り返りにサイドライン等で評価を行い、子どもにとってより質の高い振り返りとなるように指導した。2年生という学年段階を考慮し、1単位時間の終わりに素早く記入できるように、「◎・○・△」での3段階評価で行った。また、子どもの習熟度に応じて「振り返りの視点」の「み・ふ・ね」を用いて言葉による記述も適宜行った(写真15)。



資料13 振り返りの視点



写真14 活用した振り返りシート

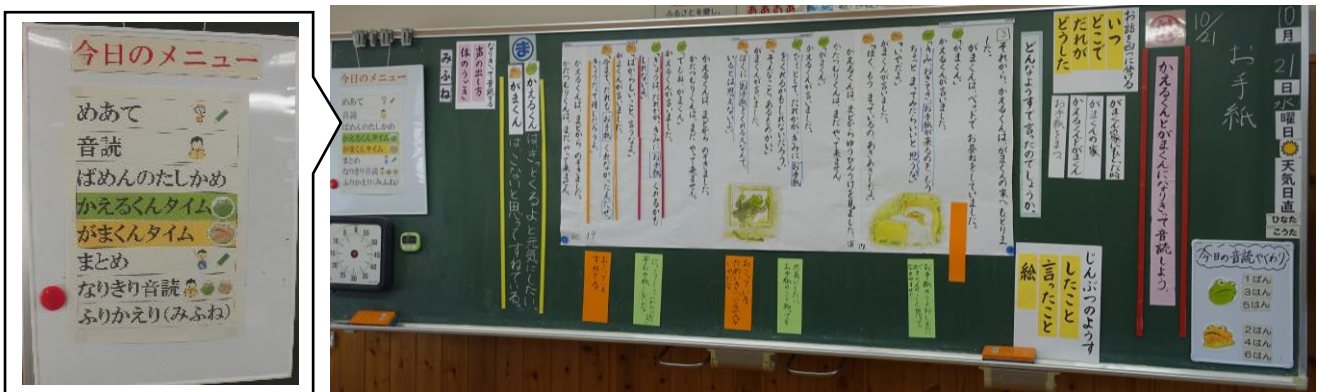
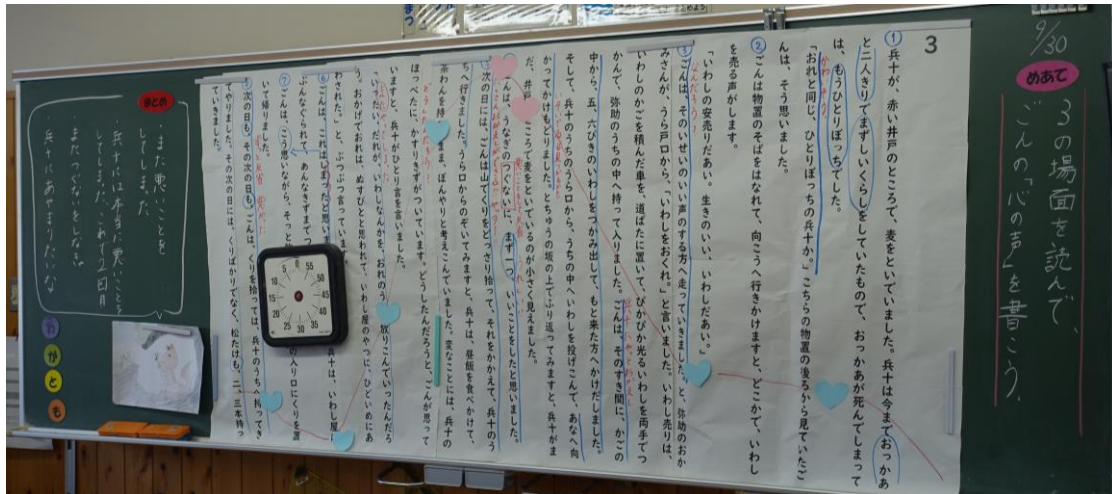


写真15 板書の例 (「お手紙」の実践から)

### (3) めあて・まとめ・学習課題の適切な設定（第4学年「ごんぎつね」の実践より）

子どもが1時間の授業の中で、何のために学び、何を学び、何がわかる・できるようになったのか明らかにできるように、「めあて」、「まとめ」、「学習課題」を適切に設定した。これらには一貫性をもたせるとともに、中心的な学習課題や単元のゴールに迫ることができるようにした。

本実践では、毎時間の授業で「めあて」と「まとめ」を必ず板書し、子どもへの意識付けを図った（資料16）。板書する際には、掲示物や枠囲みをすることで強調した。

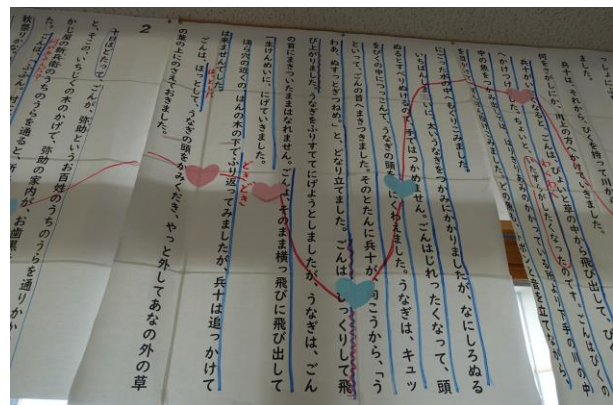


資料16 板書の例（「ごんぎつね」の実践から）

毎時間の学習課題は、中心の学習課題であった「ごんへのお手紙づくり」につなげるための「ごんの心の声探し」を設定した。具体的な手立てとして、登場人物の気持ちを想像する文章を本文から見つけ、サイドラインを引くようにした（資料17）。全体指導と個別指導が円滑に進められるように、黒板掲示用教材文と子ども配付用の教材を統一させた。その教材文に登場人物の気持ちの変化を視覚的に分かり易くするために、心情曲線を用いた（資料18）。



資料17 サイドラインを引いている様子

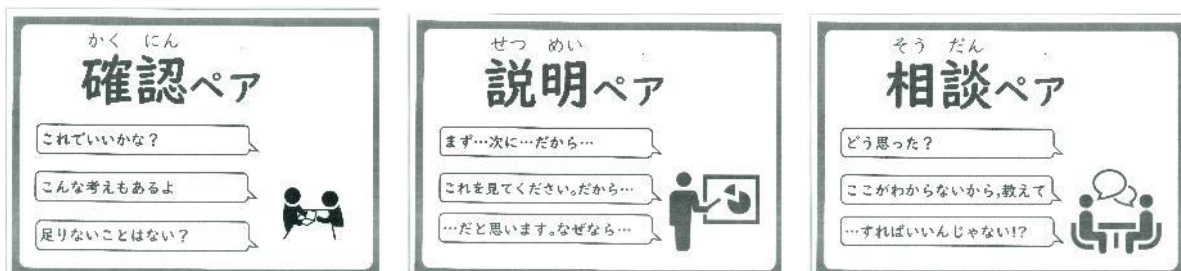


資料18 出来上がった心情曲線の一例

#### (4) ペアトークの積極的な活用

新学習指導要領において、国語科では「日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」ことを目標に挙げている。また、「伝え合う力を高める」とは「人間と人間との関係の中で互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力を高めることである」と示されている。

子ども中心の対話的な深い学びを充実させるために、1時間の授業の中で「ペアトーク」を積極的に用いた。授業者と子どもたちが目的を意識した「ペアトーク」ができるように、目的を「確認」、「説明」、「相談」の3つに分類し、子どもたちに示すようにした（資料19）。



資料19 ペアトークの3つの目的

#### ア 第6学年「帰り道」での実践

登場人物の心情について想像した自分の考えを深めるために、考えの同じ立場や違う立場の級友と意見交流や話し合いを行った（説明ペア）。

また、意見交換したことについて全体で交流する場を設定し、自分の考えを改めて整理し、本時の学習課題の振り返りを行った（資料20）。



資料20 説明ペアの様子

#### イ 第2学年「お手紙」での実践

文章を読んで感じたことや分かったことを共有するために、サイドラインを引いた箇所をペアで確認し合う場を設定した（確認ペア）。

互いの考えを確認し合うことで、学習に不安感をもつ子どもやどこにラインを引いていいかわからない子どもへの手立てとした（資料21）。



資料21 確認ペアの様子

### 3 [視点3]基礎学力の向上について

基礎的な学力の向上は、読書を楽しむ上で欠かすことのできない視点である。諸学力調査の結果から、本校は言語事項について課題があることが見えた。基礎的な学力の向上を目指し、次の取組を行った。

#### (1) 朝ドリルの設定

定期的なドリル学習の時間と場を確保するために、朝ドリルを行った。朝読書の後の午前8時35分から午前8時45分までの10分間に設定し、毎朝全学年で取り組んだ（資料22）。

子どもが主体的に取り組みやすいように、全学年共通の教材を選定した。さらに、曜日ごとに教科を指定することで（表1）、子どもが見通しをもって取り組めるようにした。また、担任や担任外の教師での指導体制を整えることで、学習環境の構築や学習規律の整備にもつなげた。



資料22 朝ドリルの様子

表1 朝ドリルの曜日ごとのメニュー

曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
内容	[国語] 漢字スキル うつしまる視写	[算数] 計算スキル 算数力トレーニング	[国語] 漢字スキル うつしまる視写	[算数] 計算スキル 算数力トレーニング	[国語] 漢字スキル うつしまる視写

#### (2) 補充学習の設定

金曜日の放課後に補充学習を設定した（資料23）。学習内容の定着が不十分な状況にある子どもに学習内容を補完したり、さらに力を伸ばしたいと思っている子どもに成就感を味わわせたり、個に応じた指導の充実を図った。教科書問題やテストのやり直し、子どもが選んだ学習課題等、子どもの実態やニーズに応じた学習内容にした。また、名称を「〇〇塾」や「□□ゼミ」と銘打ったり、教育相談で指導・支援したりしながら、子どもの学習意欲の喚起を図るようにした。



資料23 補充学習の様子





### III 研究の結果と考察

本年度の努力目標の達成状況を評価するために、子どもへ意識調査を行った（8月と12月に実施）。読書と国語科の学習に対して好意的に感じている子どもが増加した。国語好きの増加という目標は達成できたが、読書好き90%の目標は達成できなかった（図3）。

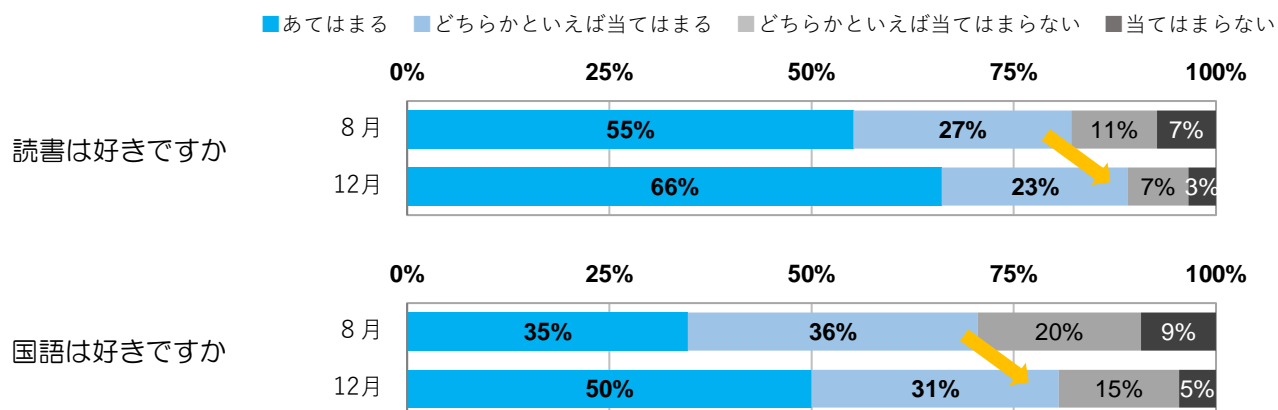


図3 子どもの意識調査の結果①（読書と国語に対する意識について）

「勉強になるから」本を読む子どもが増加し目標を達成した（図4）。6%と微増であるものの、全体の51%と2人に1人は読書が自身の勉強になると考えているということになる。

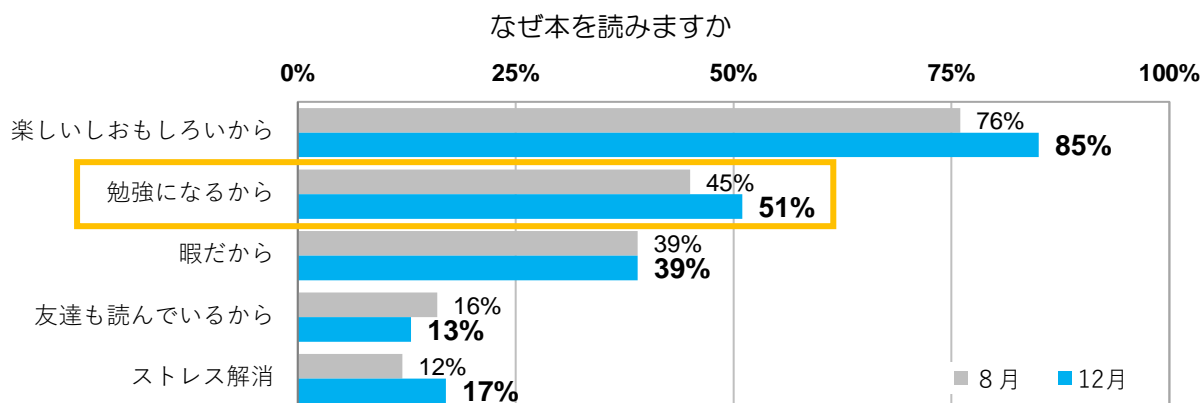
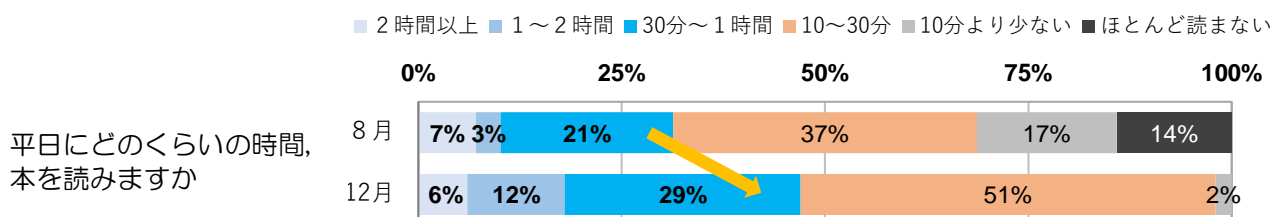


図4 子どもの意識調査の結果②（本を読む理由について） ※数値は第3学年以上の平均値

読書習慣についての結果は、次のとおりである（図5）。どの項目についても向上が見られたが、目標達成には至らなかった。



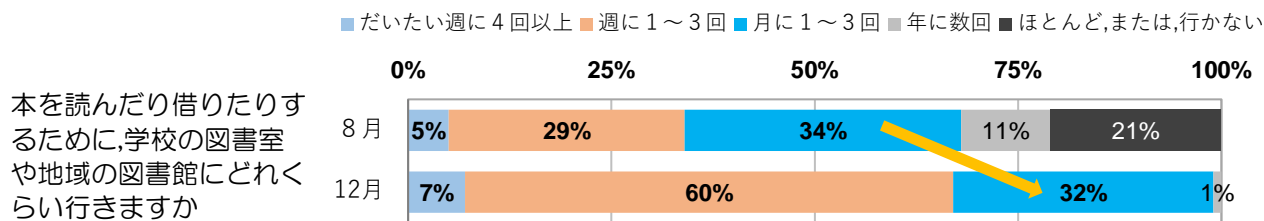


図5 子どもの意識調査の結果③（読書習慣について） ※数値は第3学年以上の平均値

国語科での学習の日常化についての結果は、次のとおりである（図6）。国語科の学習を日常生活に生かそうとする子どもが増加しており、目標を達成した。

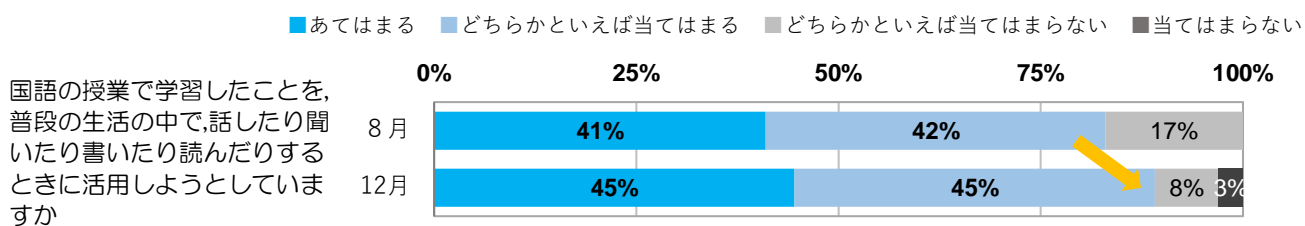


図6 子どもの意識調査の結果④（国語科での学習の日常化について） ※数値は3年生以上の平均値

言語事項の取得状況を評価するために、1，2学期に行った単元末テストを用いた。その結果は、次の通りである（図7）。目標値である80を上回る学年が多く、全体平均も目標値を上回ることができた。

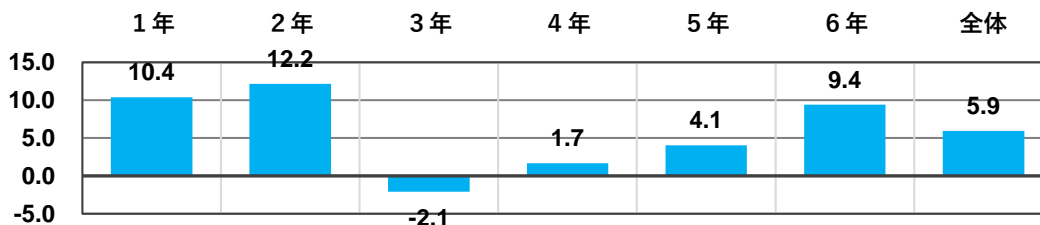


図7 単元末テストの結果（言語事項） ※目標値「80」を0として

以上から、努力目標の達成状況は、次のとおりとなった（◎：達成 ▼未達成）。

- ▼子どもの90%が読書好きである（89%が読書好きであった）
- ◎「勉強になるから」本を読む子どもの増加
- ▼平日に30分以上読書する子どもの割合を現状から20%向上する（16%向上した）
- ▼月1回以上の図書室利用率が100%（図書室利用率99%であった）
- ◎国語好きな子どもの増加
- ◎国語の学習を日常生活に生かそうとする子どもの増加
- ◎単元末テストでの言語事項の定着率が80%以上
- ※県学力調査での結果を前年度よりも上回る（3学期に評価予定）

学習面での達成が顕著であった。これは、[視点2]及び[視点3]での取組の効果といえるだろう。[視点2]の取組により、読書活動の要である国語科の学習が子どもにとって魅力的なものとなった。また、国語科の授業において「中心的な学習課題の設定」を行い、学ぶ目的を明確にしたことで、学習したことを日常の生活に生かそうとする子どもが増加したと考えられる。そして、そのことが読書活動の充実にもつながっていると考えられる。さらに、漢字の読み書きや言葉の習得により、より読書を楽しむことにつながったと思われる。本年度は、国語科の授業の工夫・改善を行いつつ、国語科の学習と読書活動を関連付けたことで、「勉強になるから」本を読む子どもも増加した。この結果だけで、学習と読書の因果関係はわからないものの、「読書活動の推進」を柱とした取組を進めたことで、結果として学習面への好影響を与えたことは推測できる。

「平日に30分以上の読書」及び「月1回以上の図書室利用」は、努力目標の達成に至らなかったが、ともに大きな向上が見える。これらは、「朝読書」と「図書室利用時間の整理」による効果だと考えられる。朝読書は毎朝10分間の取組であり、図書室利用は原則週1回設定していた。結果、「10～30分」読書する子どもと「週に1～3回」図書室利用する子どもの大幅な増加につながった（グラフ上の■）。さらに、不読児がまったくいなくなったことは大きな成果といえる。両取組を意図的・計画的に用いたことで、適切な読書習慣が身に付き始めたと考えられる。アンケートから、朝読書や図書室の定期的な利用は子どもの読書活動の活性化につながったことがうかがえる一方で、10～30分の読書が多い現状から、朝読書でのみ本を読んでいる子どもが多いとも考えられる。つまり、朝読書が本校の読書活動を支えているといえ、子どもが自主的に読書に取り組めるまでには至っていないともいえる。今後は、より主体的に読書に関わろうとする子どもの育成を目指す取組を進めていく必要がある。

#### IV 研究の成果と今後の課題

##### 1 研究の成果

- (1) 読書活動の要である国語科の授業の工夫・改善を図ったことで、国語科の学習を好意的に感じる子どもが増えた。また、国語科の授業において「中心的な学習課題の設定」を行ったことで、学習を日常生活に生かそうとする子どもが増加した。国語科と関連付け、並行読書や関連書籍の読書を行ったことで、「勉強になるから」読書をする子どもが増加した。
- (2) 基礎学力の向上の取組を行ったことで、言語事項の習得に改善が見られた。
- (3) 読書活動の推進を進めたことで、読書好きの子どもの増加と適切な読書習慣の確立に一定の成果を得た。

## 2 今後の課題

- (1) 意図的・計画的な読書活動を進めるとともに，子どもが主体的に読書に取り組むための手立てを講じていく必要がある。
- (2) 意図的・計画的な読書活動と学力の向上の因果関係を探るために，県学力調査の結果を活用したい。その上で，本研究の取組を検証し，改善を図っていきたい。

## おわりに

昨年度から校内研究で取り組んできた、読書活動の充実による学力向上の取組について、昨年度は読書好きな子どもは増えたものの、学力向上につながる検証まではできませんでした。そこで、本年度は昨年度の取組をベースに、「意図的・計画的な読書活動」を設定しました。具体的には、視点1「読書活動の推進」、視点2「国語科の授業の工夫・改善」、視点3「基礎学力の向上」の3本柱で研究を進めてきました。そして、その検証のために具体的な努力目標を8項目設定し、今年度の研究の成果と課題を明らかにしていこうと考えました。

成果として8項目中県学力調査（3学期実施予定）の結果を除く、7項目全てで向上するという成果が見られました（7項目中4項目は目標達成 3項目は未達成）。しかし課題として、設定された朝読書の時間中心の読書活動になっている児童も多いことから、今後は児童が主体的に読書に取り組むための手立てを講じていく必要があることも明らかになりました。

次世代を担う子どもたちを、「自ら進んで読書をして、読書を通して人生を豊かにしようとする子ども」へと育成していくために、今後も全職員で研究を深めていきたいと思えます。

最後に、本校の研究推進にあたって、指導・助言をいただいた上益城教育事務所濱本竜一郎指導課長様、御船町教育委員会上杉奈緒子指導主事様、熊本市立城東小学校長佐藤俊幸様をはじめ、管内の諸先生方に心より感謝いたします。

## 参 考 文 献

- ・文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年度告示）国語編』株式会社東洋出版社
- ・文部科学省 国立教育政策研究所（2019）『平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査報告書・調査結果資料』
- ・文部科学省 国立教育政策研究所（2017）『平成29年度全国学力・学習状況調査報告書・調査結果資料』
- ・熊本県教育委員会（2019）『熊本の学び推進プラン～熊本の未来の創り手となる子供たちの学び』

## 研 究 同 人

中野 浩幸	吉村由美子	田中あかり	河口 みさ	田村 和也
佐藤 教子	南 博文	高橋 孝典	松崎 博文	吉崎 洋子
中村 里美	川上 千恵	仲野 聡子	本田 朝美	高野 紗千
吉村 広伸	平田 美保	福田そのみ	山本 美穂	中川 恭文
高木 拓	坂本 佳愛	田中 壮介	宮本 浩史	松出 直子
左座 彰	中川 聖介	灰本 彩香	市原 清美	山村 園絵
坂口 浩子	塚本 恭子	嶋津 貴子	松岡るり子	寺園 光湖